

ただ一燈（いつとう）を頼め

ともしび運動の今までとこれから

去る十月十九日、第五十五回県社会福祉大会が開催されました。今年度は「ともしび運動三十年」を記念し、運動の誕生から神奈川の福祉に携わり、運動への人々の想いを目の当たりにされてきた横須賀基督教社会館館長・県立保健福祉大学学長の阿部志郎氏をお招きし、記念講演を行っていただきました。今月号は、この講演の一部をご紹介します。

県民の心に響いた「ともしび」

「のどかなり」というのは芭蕉の句ですが、私たちは様々な願いを持ち初詣に行きます。家内安全、無病息災、商売繁盛、学校合格等々。しかし、何か欠けているのではないのか、隣人の幸せを祈っているのか、世界平和を願える人がどれだけいるのか、と思います。

隣人の存在がだんだん薄くなってきました。その隣人と手を取りあって、豊かな地域社会をつくろうと継承したのが「ともしび運動」でした。それは、幸せとは何か、とその幸せを一緒に考えようとする問題提起であります。この運動は単なる精神運動ではありませんでした。

この運動を広げていくのに、いくつかの段階を経ました。まず、最初は県行政の中での縦割りを総合的に横並びにし、取り組めるようにすることでした。そして、いろいろな仕組みを経て、ともしび運動をすすめる県民会議ができたのです。

県民会議を軸にして、その運動は各地域や職場で繰り広げられ、二百八十万人の県民が参加したと言われます。それを受け、県では総合政策が立ち、それが「福祉プラン」となり、「まちづくり条例」もできました。バリアフリーの基盤ができ、また、グループホームが生まれ、地域作業所も誕生しました。県庁の中には「ともしびショップ」の第一号ができ、今では四十四号店まであります。

このような運動の展開は、「ともしび」が県民のところに響き、その「ともしび」をしっかり受け止めたからだと思っております。

「ともしび運動」の役割

行政も、歴代の県知事が経済成長の中に「福祉」を重点施策にあてて重視をしました。そして、故長洲知事がともしび運動を展開し、そのあと

の岡崎前知事、現在の松沢知事と受け継がれています。

私は、福祉の心に富んだすぐれたこの地域を持っていることに、いかに恵まれ、そして、県が提唱した運動が三十年も続いている例を他では見ません。それでも、「ともしび」の精神は何か？「ともしび」をいかに生かして次の世代に伝えるのか、それが私たちの課題だと思えます。

北欧に行った時、一人暮らしのお年寄りを訪ねました。冬の半年間は一人暮らしです。「寂しくありませんか」と聞いたら、当然「寂しい」と答えます。「どうするのですか」と聞くと、食卓の上のろうそくの灯を見て、「その光が私の心を温めるのです」と印象的なことをおっしゃいました。「ともしび」、それは人々の心を温めるものだと思います。

今は、県内でボランティア活動が展開され、ともしび運動は参加する福祉を作ろうとしています。NPOやボランティア団体、地域がネットワークを作ろうとしています。それは単なる連絡網ではないのです。問題に対し、解決をする姿勢を共有することなのです。



「ともしび運動」の成り立ちとこれからについてを講演する阿部志郎氏